

学び合いの中で個の読みを広げ深める国語学習

1 国語科で願う豊かな学びの姿

本校国語科では、幼小中一貫教育を進める中で、11年間の発達段階を考慮した国語学習がいかにあるべきかを、授業実践を通じて探っている。以下は、中学校3年生生徒の学習のふりかえりにみられる、学びの姿の一例である。

「新しい博物学」の時代を読んで、全く関係なさそうな分野同士が意外にも関わり合っているのだということがよくわかりました。藤原定家が日頃から天文現象を観察し続けていたこともですが、超新星爆発に関する過去の記録も調べた上での正確な記録だったということにも驚きました。

古典と天文学のような、種類の違う学問同士の結びつきで今まではっきりしなかったものが明らかになるということから、日頃から偏った見方ではなく、広い視野をもつように努めなさいということ（筆者は）暗に伝えたいのだと思います。毎日の授業や、友達とのつきあい方にも通じることだと思いました。

〈中略〉

（異なる分野が関わり合っている日常生活の例として）味の素の例はなるほどと思いました。化学の分野と家庭科の分野が関わっているいい例だと思いました。家庭科は、栄養などで化学と関わりがあるのも納得できます。でも、そこまで意外な感じは受けなかったのも、もっと意外な分野同士のつながりについても知りたいと思いました。

これは、説明的文章『新しい博物学』の時代のまとめとして生徒が書いたものである。天文学単独では明らかにならなかった超新星爆発の時期が、古典「名月記」の記述により特定されたという事例についての新鮮な驚きが表れている。また、この文章は学問の総合的な結びつきの可能性を述べているが、この生徒は読み取った内容を、発展的に自分のこととして理解し、自己の生活と結びつけて述べている。つまり、情報を正確に取り出したり、文章を肯定的に理解したりする読み方だけでなく、言外に込められた筆者の意図などを、自己と照らし合わせて解釈することができているといえよう。後半は、異なる学問分野が結びついた例を身近なところから探し、生徒同士で情報交換を行ったことについての記述である。他者の意見や考え方を受けて、内容、形式や表現、論理的思考の正確性等を理解、評価したり、自分の知識や経験と関連づけて発展的に考えようとする読みが実現された例だといえる。この生徒は、学習後も探求心を持ち、さまざまな学問分野の結びつきという視点からメディアや読書に興味をもって臨んでいた。

本学校の国語部では、ことばの学習、特に「読むこと」の学習を通してものの見方や考え方を広げ、深めながら、子ども自身が自己の変容をとらえる機会を大切に、よりよい言語生活や社会生活を送ろうとすることのできる子どもの姿をめざしている。

2 昨年度までの研究の経緯

(1) 子どもをとらえるという視点から

本部会では、発達段階ごとに大切にしたい言語習得の姿を、附属学校の3ブロックごとに次のように仮定した。このことで、それぞれの段階でつけたいことばの力や、その力をつけるための学習活動を見出したりする上での助けとなった。また、学習の中で子どもをとらえる上での指標として指導者も意識することができた。これは、子どもの成長過程における言語習得の順序を示すものではないということに注意する必要がある。

初等部前期	読み聞かせ等を通じ、主として音声からことばを習得する。 【音声と事物・事象とのつながり】 音読を繰り返したり、文字で書いたりすることを通してことばを習得する。 【音声と事物・事象と文字とのつながり】
初等部後期	理解したことばの意味を、様々な言語活動を通じて何度も繰り返しながら触れることで、自分のことばとして習得する。 【抽象的なことばの意味とのつながり】
中 等 部	様々な言語活動を通じて、抽象的な感覚や概念をことばで獲得したり、より豊かに表現したりする。 【ことばの概念（多様性）と表現とのつながり】

(2) 国語における思考力・判断力・表現力について

学習や日常の言語活動では思考・判断が同時に行われたり繰り返されたりする機会が多いことや、思考力・判断力は、筆者や話し手・聞き手の意向などを読んだり聞いたりして「理解する活動」及び、話したり書いたりして「表現する活動」に総合的に表れるとの考えから、大きく「思考力・判断力」と「表現力」の2つに分けた上で、それぞれを次のように仮定した。

○思考力・判断力

言語の意味やそれに含まれる考え・意図等に基づいて、直感をはたらかせたり、論理的に考えたり、想像をふくらませたりする力

○表現力

自分の考えなどを整理して、伝わりやすい表現を思考したり判断したりしながら、話したり書いたりする力

(3) かかわり合いを通して、思考力・判断力・表現力を育てることについて

ことばに関する知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力、表現力を養うためには、まず授業の中で、何のためにその文章を読み、どういうことを目指すのかといった目的を明確にすることにした。次に、文章を単に読むだけでなく、思考力・判断力と連動した形で読む力を高める取り組みを意識した。例として、自由記述に慣れな子どもには、授業のまとめの時に、自分の考えを簡潔に書かせて自由記述に慣れるようにしたり、自分の考えを所定の字数・様式にまとめて表現するなどの練習を行ったりすることである。文章を読んで理解することによって得られた知識について、実生活や行動と関連づけて表現する力を高めるとともに、他方で書いたものを更に深めることを通じて読む力を高めることが期待される。

このように、読むという営みに視点を当てた場合は、(2)のように「思考力、判断力」と「表現力」とは分けて考えられるが、国語学習という視点からとらえた場合、思考力・判断力・表現力は常に密接に関連しているととらえ直し、思考力・判断力を中核として、読みの力・表現する力を総合的に高めていくことをねらった。

さらに、思考力・判断力、表現力を育てていく上での、有効なかかわり合いのあり方を次のように考え、学習の中に効果的に位置づけるようにした。

初等部前期	教師と子ども、または子ども同士の1対1のかかわり合いの中から子ども全体に広げていく。	
初等部後期	他者の発言に対して関心が向くことから、小集団やより多くの人数による対話を可能にしていく。	
中 等 部	発達段階の特性から、自分を表現することへの抵抗も考慮し、これまで培ったさまざまなかかわり合いを機能させる。	

3 本年度の研究

(1) 思考力・判断力・表現力についての11年間のつながり

2の(2)を押し進め、本年度は附属学校園3ブロックでめざしたい思考力・判断力・表現力を次のように考えた。

初等部前期	読む、聞く、書くなどの豊かな経験から、言葉に興味・関心をもち、進んで言葉や動作などで表現しようとする力
初等部後期	抽象的な意味や間接的・暗示的表現をとらえて言葉を理解し、他者の考えと比べたり、他者の考えを取り入れたりしながら、言葉だけでなく、他の方法も交えて表現する力
中 等 部	言語の意味やそれに含まれる考え・意図等に基づいて、直感をはたらかせたり、論理的に考えたり、想像をふくらませたりしながら、伝わりやすく表現する力

これを踏まえ、さらに「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のそれぞれの領域ごとに思考力・判断力・表現力を次のように設定した。

	話すこと・聞くこと	書 く こと	読 む こと
初等部前期	身近なことや経験したこと、関心のあることについて、進んで話したり、共感的に聞いたりする力	身近なことや経験したこと、関心のあることについて順序立てて書く力	物語を中心に、音読したり他の意見を聞いたりしながら、登場人物の様子や話の展開をとらえる力
初等部後期	相手や目的に応じて、事実と意見とを明確にして伝えたり、他者の考えを自分と比べながら聞いたりする力	相手や目的に応じて、事実と意見とを区別したり、表現の効果を考えたりしながら書く力	文章の構成や文章に表れているものの見方や考え方について、事実と意見とを区別したり、他者の考えを自分と比べたりする力
中 等 部	相手や目的に応じて、他者の考えや客観的な視点を踏まえながら伝えたり、他者の考えを批評したりしながら聞く力	相手や目的に応じて、構成を考えたり、客観的な視点を交えたりしながら、効果的な表現を考えて書く力	文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連づけたら、批評的な視点をもったりする力

(2) 思考力・判断力・表現力を育て高めるための授業づくり

①学級全員で学び合う場面をどう構想するか

初等部前期前半の時期は、身の回りの豊かな経験から紡ぎ出されるあらゆることばが、生きた学習として成立する。この段階ではまず保育者や友だち、あるいは自分自身が発する音声言語と、具体的な事物、事象などを結びつけることを大切にす。初等部前期後半は、小学校低学年に相当するが、この時期は、音読や書くことの基本姿勢を確実に身につけることを大切にしながら、読むことに対する興味関心を培ったり、その他の国語学習の基礎を養ったりする。初等部後期は、子どもが具体物を表現することばに加えて、徐々に抽象的なことばを獲得していく時期と考える。従って、抽象的な感覚や概念などを表すことばにも子どもたちの目を広げていく。また、この段階では、音読や書くことの繰り返しにより語彙を増やしたり言語感覚を身につけたりすることも重要である。また、文章の記述に即したとらえ方ができるように心がけ、文章を読み取って生まれた自分の考えがどのことばから派生しているのか、その根拠を明らかにしながら表現するような活動もこの時期からは大切にす。中等部の時期は、これまで、ことばと体験とのつながりで理解できたものが、ことばからだけでもイメージすることができる

ようになる時期であるとする。子どもには、ことばの微妙なニュアンスをとらえたり、使い分けたりする力が大切になってくる。これまでに培った読みをベースに、抽象的な感覚や概念をことばから獲得したりことばで表現したりすること（より正確に、より豊かに）をいっそう洗練させていく。以上のことから、読みの要素を段階的に多様化できるような単元を構成することで、学級全員での学び合いも豊かになっていくであろう。

また、学級全員の学び合いで広げ、深めたい読みの部分と、個に委ねる読みの部分とを明確に区別し、学級全員の学び合いで到達したい読みのレベルを意識した学習展開を構想したい。

ペア学習を起点として教師が子どもの学びを確実につないでいく初等部前期、さまざまなかかわり合いのパターンを意図的に仕組んで伝え合いの練習、経験を積ませる初等部後期、子ども同士の伝え合いが成り立つような教師の手引き等による支援に重きを置く中等部ということ意識して学習活動を構成するにあたり、これまでは、ペア・小集団による学習の成果を学級全体に広げ、深めていく展開が一般的であったが、全体の学び合いをまとめとして位置づけることのみが学び合いを活性化させる唯一の方法ではない。展開のどこにペアや小集団学習の枠を設けるか、ねらいによっては全体の学び合いを受けてペア学習や小集団学習を位置づける方が効果的な場合、さらにそれぞれの学習形態を多層的に積んでいくことでより深まりのある学び合いを生み出せる場合もあるだろう。

②学級全員の学び合いのための教師のはたらきかけ

ここでいう学級全員で学び合う場面とは、教師の発問に子どもが答えていくような読み取りの一斉授業や、個々やグループ学習の成果を学級へ発信するような活動と同義ではない。子どもと教師とのキャッチボールを他の子どもが聞いているだけという一般的に陥りやすい授業展開ではなく、子ども同士の「学び合い」をより活性化させるために、以下のはたらきかけを心がけたい。

学び合いは、「伝える側」と「受け手」の両方の指導で初めて成り立つものであり、両者に不可欠なのは相手意識である。話し方の指導、聞き方の指導等を平素の授業で機会をとらえながら繰り返し、子どもが自分のことばの使い方を意識する機会を与える。また、かかわり合いの学習においては学習の手引き等で誰とどのようにかかわっていくのかを明示する。

学び合いが成立する学習の中心として「話す・聞く」という表現活動を重視し、その学習過程に「書く」活動を位置づける。子どもの発達段階に照らし合わせると、中等部に進むほど感覚を相手に伝えるための思考力判断力表現力が問われ、養われるようになって考えられる。例えば伝える側へは適宜書いてまとめる時間を与えたり、受け手へは平素からの指導で一回で聞き取る、共感的に聞く、相手のいうことを繰り返して返答するなどの実践を行う。

教師が教材研究によってどう読み広げたり、読み深めさせたいのかを明確にもつことはもちろんであるが、読みの押しつけにならないようにすることを心がけたはたらきかけをしたい。例えば、一つの読みに陥らないよう常に子ども全体へ広げたり、先の発言を踏まえた次の発言を引き出すよう促したりすることである。具体的には、認める（意欲につなげる）、掘り下げる（理由を問う、言い換えさせる）、提案する（転換、発展）はたらきかけを教師が意図的に行うことである。

4 成果と課題

子どもの学びの変容は、初読の読み始まり、繰り返し読むことで内容をより詳しく読み取り（確かな読み）、それを踏まえて自分の考えを構築していくという過程から生まれる。その中に学級全員の学び合いをどう構成するかが今年度の授業実践のポイントであったが、単なるかかわり合いではなく、学び合いを意識することで、一層教師が子ども（学習者）に寄り添って学習を組み立てることができ、本研究の初期に設定した「発達段階ごとに大切にしたい言語習得の姿」の妥当性が見えてきた。思考力・判断力・表現力について、今回3ブロックと領域ごとに分けて設定したが、今後の実践を通して、その妥当性も検証していきたい。また、評価に関して、現時点では学び合い前後の学習記録から子どもの読みの変容をとらえることを考えているが、学級全体の学び合いのレベルをどう評価するかといった点も大切な課題である。

（文責 川井 史生）